

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 徐 中芄

景観評価研究の本質的な目的は、人間が環境に対して付与する意味や価値を把握し、人間と環境との良好な関係構築の図るための手がかりを得ることにある。この景観評価をめぐる研究はますます活発化しているものの、評価因子の普遍性、あるいは生物的／文化的決定要因の議論を含む理論面との関係についての研究は未だ十分ではない。特に日本においては、個別の研究成果を体系的に整理し評価因子の共通性や構造性に関する議論が不足している。

そこで本研究は、景観評価において重要な研究課題である景観選好に着目し、評価因子の構造性と普遍性について検討し、理論的枠組みに関する先行研究との総合的な考察を通して、評価因子の構造を明らかにしようとするものである。具体的には、(1) 欧米において広く参照され、評価因子としての標準的位置付けを得つつある Kaplans による四つの評価因子の統合性と有効性を考察し、日本における研究の現状の問題を提示する。(2) 日本の研究成果を用いて評価因子の構造性を解明し、さらに選好に関連する欧米の理論(生物的及び文化的決定要因)と合わせて統合的な理論化を試みる。(3)「百選・百景」を対象事例とし、因子構造の普遍性を確認し、その具体的な評価対象との関係を明らかにする、ことを目的としている。

序章では、研究の背景と目的を述べ、合わせて既往研究のレビューを踏まえながら、本研究の位置付けを示している。

第二章では、景観選好に関わる評価研究論文をレビューし、Kaplans の景観選好の因子概念について、環境心理学における位置づけと射程を把握するとともに、評価因子の統合性と有効性を考察している。更に、日本の現状に関して、海外文献との比較を通して問題の所在と今後の方向性を検討している。これらの結果、Kaplans の枠組みを構成する四つの評価因子に関して、「わかりやすさ」に関する研究の蓄積は少ないものの、「まとまり」、「ミステリー」、「複雑さ」は多くの研究で検証され、その有効性の高さが認められている傾向が示された。また、Kaplans による枠組みの提示を契機に評価因子の種類が収斂する傾向にあることを明らかにした。一方、日本の既往研究では、自然性が選好に関する重要な評価因子として多く掲げられているものの、個々の結果を超えた相互の議論が進展しておらず、評価因子を統合しようとする動きに乏しい現状が明らかとなり、今後の課題として考察している。

第三章では、日本において公表された景観評価研究の結果群をデータとして使用し、評価因子の構造性を検討している。具体的には、日本の研究でよく用いられる「美しい」、「親しみのある」、「好きな」、「自然な」、「魅力的」、「開放的」、「良い」、「広がりのある」など出現頻度の高い 21 個の評価因子を抽出し、グラフィカルモデリング分析を用いて、各評価因子間の因果関係を検討している。その結果、因子間の因果関係のメカニズムを、それぞれに「自然な」、「良い」、「美しい」と繋がる構造として整理している。さらに、この構造を選好性に関わる理論である生

物的決定要因及び文化的決定要因との関係から考察し、生物的決定要因と文化的決定要因とは「発達性」の概念により関係付けられることを議論したうえで、評価因子（評価言語）の相互関係にもとづく構造との統合について考察している。

第四章では、各地の「百景・百選」を対象として用い、前章で導いた評価構造の検証を試みるとともに、さらに評価構造と具体的な評価対象との関係についても分析している。具体的には、百景・百選の各写真に関する内容記述から、「自然な」や「親しみのある」などの評価言語及び「公園」や「農地」などの評価対象を抽出し、因子間の関係を分析し、前章で得られた評価構造と比較考察を行っている。その結果、因子間の布置関係の近さから、両者が概ね類似していることを確認している。さらに、対応分析により評価対象と評価言語の関係を分析し、山や池と「変化のある」、住宅や路地と「落ち着きのある」、寺院や古民家と「魅力的」等の関連性が高いことが明らかにしている。

終章では、各章の結果を踏まえ、Kaplans の四因子と本研究で得られた因子構造とを比較しつつ総合的に考察している。また、生物的決定要因及び文化的決定要因の枠組みに基づき、発達性の概念を取り入れながら、三章、四章の結果について考察し、人間-環境系における様々な問題の解決に向けた計画論的視点から、本研究の統合的な理論の有用性を論じている。

以上、本研究は、景観選好に関わる既往研究論文における研究結果をデータとして用い、評価因子間の関係を分析整理して構造性を明らかにするとともに、景観評価および環境心理に関わる先行研究から景観選好に関する理論的枠組みを抽出し、その両者から景観選好に関わる評価構造を明らかにしたものである。これまで、部分的、理論的な論議に止まっていた景観選好の評価構造に関して、ユニークな方法を用いて総合的に論じたものと評価され、学術上、応用上、寄与するところが少なくない。よって審査委員一同は、本論文が博士(農学)の学位論文として価値のあるものと認めた。